

私と強制入院？

2023年9月27日

弁護士 佐々木信夫

1

自己紹介

昭和40年 東京都生まれ

幼少期から中学2年の終わりまで、愛知県の知多半島の田舎で過ごす。

中3から高校卒業まで北海道室蘭市で過ごす。

高校卒業とともに上京。

1浪して、早稲田大学政治経済学部政治学科入学。

政治哲学の飯島昇蔵先生のゼミ。

1留して、卒業。

2

自己紹介 2

1990年、愛知県の(株)豊田自動織機に就職。
豊田織機は、トヨタグループの源流であり、一部上場企業。
現在は自動車産業の一翼を担う。

私は、自動車事業部営業部営業課に配属される。
長草工場といって、愛知県大府市にある工場に職場があった。

3

知多半島とは？大府市とは？

知多半島とは、名古屋に近接する地帯は大工業地帯。
住んでいた知多市は、その大工業地帯が終わり、自然の海岸線が
現れる場所。
大府市とは、知多半島に隣接する三河の工業地域にあり、トヨタ
系の企業が林立する地域。
トヨタの企業城下町。

4

なぜ、知多に帰ったか？

自分の両親は東京の人間だが、仕事の関係上、知多市に家を持っていた。

たまたま父親も名古屋製鉄所勤務で、家族が知多市にいた。

そこで、独り暮らしに疲れて、帰省のつもりで知多半島にUターンしたのだろうか？

新入社員として

新入社員として希望にあふれて入社した。

しかし、そのころはバブルの増産体制で、工場実習という名目で生産ラインに1年以上駆り出された。

工場実習も終わり、事務所部門に戻る。

仕事は嫌いではなく、精力的にこなした。

人間関係 1

事務部門に行った当初は、会社の中でも高学歴であり、元気もよかったので、自分で言うのも恥ずかしいが、女子社員に人気があった。

そこで、複数の女子社員と付き合うようになった。

7

人間関係 2

自分は、社会の怖さを知らなかったもので、無警戒であった。人々の中には自分を悪く思う人がいるとは思ってなかった。

しかし、ある時から、会社内でのすべての環境が悪い方向に変わった。

いわゆる、白い目で見られるということがどういうことか、わかった。

8

なぜ会社をすぐに辞めなかったか？

人間の心は、行いを良くすれば、変えられるものだと、うかつにも信じていた。

今後精進すれば、環境もよくなるだろうと多寡をくくっていた。

しかし、状況は悪くなるばかり。

周囲からは、自分への呪詛と罵倒だけが聞こえてくる。

誰も親しく話す人物はいない。

9

入院のころ 1

入社して1年目で、大きな挫折を味わい、それでも我慢して働いていた。

しかし、職場でもなんとなく、自分の電話の内容などが盗聴されていて、職場の皆が、私の同行の逐一を知っており、嘲笑しているかのように思うようなことがあった。

入社4年目の29歳のころ、とうとう、「会社が自分を監視し、殺しに来るのではないか。」などと考えるようになった。

10

入院のころ 2

会社の状況がおかしいと思っても、近くに相談できる友人はいなかった。

会社の同期などは皆、私を排除しているように見えた。

自宅にまで監視といやがらせが及んでいるように思えた。

地滝の近隣住民が、会社と通じているかのよう。

実際に、そういった企業城下町の風土もある。

入院のころ 3

29歳の夏だったと思う。

会社の監視のような状況にパニックになっていたが、何とか帰宅した。

夜になって、家の周りで金属をぶつける音や、雑音が鳴っていた。とうとう会社関係の攻撃が来たか。

会社はヤクザにまで金を払って、いやがらせをしていると考えた。

入院の前夜 1

襲撃に備えるために、寝ないで、じっと耳を澄ませていた。

深夜になり、遠くから、大型トラックの轟音も響いてくる。

これらは私への敵意のサインだった。

私は自決しようと思ったのか、防衛しようと思ったのか、刺身包丁2本を用意して、ズボンのベルトに挟み込んだ。

入院の前夜 2

そして私は、家の中を不安によって、静かに徘徊し始めた。

両親が起きてきて、異変に気が付いた。

両親は包丁を取り上げ、落ち着くように言った。

その晩は寝ずに過ごした。

入院の日

朝になった。

これは後から気が付いたのだが、こういうパニック時に限って、なぜか消防自動車などが家の付近を走り回ることがある。

この時もそうだった。

両親は精神病院に助けを求めたのかもしれない。

結局、父親に手をつかまれ、車に乗り、そのまま父と姉と、精神病院に向かった。

入院の日 2

精神病院へ向かう自動車の中でも、周囲を走る自動車は皆、自分を威嚇しているかのようだった。

精神病院は、大府病院という。

まさに会社のある大府市の、会社の近くの山の中にある病院だった。

ますます疑いを深くした。

入院の日 3

病院は、人里から離れた、低山の林の中にあった。

コンクリートは朽ち果てている、ひび割れだらけで、錆びだらけの外観。

まさにホラー映画に出てくる「ザ・精神病院」

中からは、奇声が聞こえてきた。

入院の日 4

私は恐ろしくなって、中には入らなかった。

しかし、父が病院の人間と一生懸命話をしている。

私は、父に早くこの場から離れようと、遠くから訴えたが、聞き入れなかった。

私は、どうしようもなく、周辺をパニックの中、うろついていた。

入院の日 5

中から、屈強そうな男性が5人から10人出てきて、私をものすごい力で拉致し、病院内へ連れ込んだ。

病院の廊下で私は、組み伏せられた。

腕を固定され、強引に大量の薬剤を注射された。

すぐに私は意識を失った。私は「やめてくれ」と叫んでいたと思う。

19

保護室

気が付くと、赤さびの檻と汚いコンクリートの一室に寝ていた。

起きると、人を呼んだ。

せんべいのような布団の横には、トイレの穴がある。

金隠しも何もない穴。

中からは水を流せない。

20

保護室 2

保護室には、プラスチックの入れ物に、たぶん水が入っていたのだと思う。

窓は、奥の壁面の高い位置に小さなものがあるだけ。

前面は、廊下と、赤さびの檻で隔てられている。

コンクリートは剥げかかったペンキの塗装がしてあるが、ほぼ剥き出し。

保護室 3

隣からは、終始、「ゲ〜〜、ンゲ〜〜」という、恐ろしげな叫び声が、大反響している。

まずそうな食事が、檻の小窓から入れられ、床にじかにおかれるが、とても食べる気にはならなかった。

食べてみたが、やはり、まずかった。

保護室 4

檻へは、誰もほとんど見に来ない。

ただ現実を忘れるために、半ば眠って、意識をもうろうとさせるだけ。

ある時、どうしても我慢ができなくなり、例の床の穴に用を足した。

便秘気味だったので、それが外からの操作で流れなかったらしく、看護師が穴の便器を掃除していて、私を憎々しげに見ていた。

23

保護室 5

私にとって、この時の便所掃除された屈辱は、忘れがたいものだ。

何日保護室にいたのかは記憶がない。

保護室を出るときにわかったのだが、例の雄たけびの大絶叫は、隣の保護室の老人が発していたものだった。

私が出る際には、その老人も身体拘束を外されているようで、その時にはニコニコして、上機嫌だった。

24

病室

病室は、6人部屋の畳部屋。

畳は汚い。赤さびた鉄格子の入った窓。

食堂スペースは、ゴキブリが出る。

冷房は共用スペースのみ。

便所には鍵がかからない。

25

自分の何が最も情けないか？

拘禁されると、自分も環境に適応しようとして、人格が低劣になる。

いじめられている男の子を助けなかった。むしろ面白がっていた。

みんなに飲み物とかお菓子とか、分けてあげなかった。

みんなときちんと向き合わなかった。

新入りに、掃除をさせた。

26

アカシジア等

足がとにかくムズムズして、じっと座ってられない。
ずっと歩き回っていた。
→アカシジア

薬は、並ばされて、看護師の目の前で飲む。口の中をチェックされる。

風邪だと言って、ドクターに見てほしい旨行ったら、血液を3本も抜かれた。当然、血液検査結果などない。
→贅沢な要求をすると痛い目に合うという、脅し。

27

退院

1か月で退院できた。

家族に見捨てられ
ていなかったから。

とにかく、糖分が不足しているので、甘い菓子パンがすぐに食べたくなった。

28

入院・退院してよくなったか？

投薬のほか、これと言って治療はなかった。

医師の診断や面談は皆無。

退院してもすぐに、「誰かに追われだした。」

結局、何も状況に変わりはない。

病院という収容所に、早く適応して、退院しただけ。

29

その後

結局、退院してからが、長い長い病気との付き合いの始まりだった。

29歳で入院し、30歳の時、父が失意の中で亡くなった。

32歳で神奈川に出てきて、35歳くらいに司法試験の勉強を始めた。

その間クライシスもあったが、43歳で弁護士登録、45歳で結婚。

30

結論

精神病院に治療的な意味はない。

私は何をしてほしかったかというと、私の話を聞いて、私の疑問に付き合っほしかった。

それだけあればよかった。

精神病院ではなく、新しい何か「つながり」を模索すべきだ。

以上